

1-5					
主題	胃瘻から経口摂取への取り組みにより利用者のQOLが向上した事例				
副題	一事例の取り組みでフロアの士気が上がった				
キーワード 1	経口摂取	キーワード 2	QOL 向上	研究(実践)期間	24 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 多摩済生医療団 特別養護老人ホーム多摩済生園
発表者(職種)	後藤敦子(介護職員)、田村祥子(介護職員)
共同研究(実践)者	なし

電 話	042-343-2291	F A X	042-342-2900
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	当施設は昭和 52 年に東京都小平市の緑豊かな敷地内に開設され、現在、利用定員多床室棟 94 名・ユニット棟 60 名・ショートステイ 9 床、同敷地内に多摩済生病院、デイサービス、訪問介護、訪問看護、居宅介護、地域包括支援センター、定期巡回随時対応型訪問介護看護等を併設しています。理念=添う心
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

多くの特養では胃瘻の方の受け入れを行ってきている。近年では「胃瘻にしないケア」が良い介護とされている。当施設でも胃瘻に出来るだけしないようなケアに努めているが、入所前から胃瘻を造設されている方、入院中に胃瘻造設された方が入所されている。胃瘻の方は、やはり重篤な方が多く、経口摂取への移行が以前より難しい状況となっていた。

[事例]

A 様、女性。現在 55 歳。要介護 5。50 歳の時に脳動静脈奇形、手術を行う。その 10 日後に脳梗塞、高次機能障害発症し胃瘻造設。寝たきりの状態となる。覚醒も悪く無表情で生活全般において全介助の状態の特養入所となる。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

本事例のご家族は、経口摂取の強い意向があったことと、当施設が東京都立心身障害者口腔保健センターの 3 年に及ぶ研究事業に協力したこともあり、専門医の判断、内視鏡を用いての嚥下状態の確認やケアのアドバイスを受け、経口摂取への取り組みのスタートと胃瘻の方の生活全般の改善を全職員で改めて考えた。

(目的)

- ・胃瘻から経口摂取への移行
- ・身体状況の改善、生活全般の向上
- ・職員のスキルアップ、意欲向上、多職種連携

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ・歯科医師による内視鏡検査と講義
- ・介護、看護職員による覚醒水準の向上を目的とした声掛け

- ・食事前の口周りのマッサージ、口腔内マッサージ
- ・全身の緊張をほぐすための可動域訓練、咀嚼嚥下訓練、機能訓練
- ・担当医師へ、状態報告をすることにより身体状況に合わせた服薬や経管栄養のカロリー調整
- ・管理栄養士による咀嚼嚥下訓練用献立の提案と提供
- ・理学療法士による頸部屈曲筋の緊張をほぐす為のマッサージ
- ・日々の様子と状態変化の記録の充実
- ・毎日のミーティングでのフロア職員間での情報共有
- ・家族へ進行状況の報告と意向の確認
- ・週1回の多職種とのカンファレンス

《4. 取り組みの結果》

- ・胃瘻から経口摂取へ移行が出来た
- ・食事形態は常食で1日3食の経口摂取が可能となった
- ・栄養状態が改善し褥瘡リスクが軽減した
- ・離床時間が増え、生活範囲が拡大した
- ・一般状態の向上に伴い、表情が豊かになった
- ・覚醒水準が上がりレクリエーションへ参加し笑い声が聞かれるようになった
- ・家族と一緒に食事を楽しむなどの交流が豊かになった

《5. 考察、まとめ》

本事例を通じ、職員の意識・意欲が大きく変わっていった。その人らしく生きるためには「口から食べる事」を大切な条件とし、多職種で取り組みその成果として、表情が豊かになり、意欲向上やQOL向上へとつながった。

また、多職種で連携してケアを行うことで、団結力、意識統一が生まれ、関わる職員は利用者の変化に気づき、共有することでケアの楽しさと魅力を感じフロアの士気があがった。フロアでのさらなる取り組みも前向きに進んでいる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・江崎久美子・古川美加(2012年10月)
口腔機能向上のためのレクリエーション&トレーニング ナツメ社
- ・菊谷武・田村文誉・西脇恵子(2006年3月)
介護予防のための口腔機能向上マニュアル 健帛社

《8. 提案と発信》

できない・難しいと決めつけていたことが、多職種で連携してケアを進めることで、大きな成果を上げることができた。また、様々な視点から取り組みを行うことで職員の意識の変化や成長も見られ、達成感を得たことで自信にもつながっている。多職種連携の必要性を多いに学ぶことができた。このような成功事例を増やし職員のさらなる意識向上を目指していきたい。